

桃

峰



6月号

第5卷 第6号

通卷 第37号

# 目 次 ————— 6 月 号 —————

巻頭の言葉

## 一国一字、本化僧堂の建設

自我偈講義・久遠の本仏と人間釈尊(第十六回)

## 三変土田の中に

日蓮大聖人身延入山の聖跡を慕いて(その二)

## 東京・鎌倉・身延擊鼓行脚紀行

川島本良  
日高白象

信印体験談 人間礼拝と家庭の成仏(その二)

## 忍徳十一年目の唱題

日高白象

## 私の入信の動機

初恋にやぶれて(その一)

今野俊彦

立正安國と王仏冥合(第六回)

## 転輪聖王と統一戒垣

日高白象

驚峰賛助会費志納者御芳名  
お願い

37 19

表紙題字・身延山法主藤井日靜猊下  
表紙写真・インドへ渡つた身延山金剛の釈尊像

# 本化僧堂の建設

本化の僧堂とは、本化地涌の菩薩の使命に生きんと発願する人々ばかりが、専心に行学の二道を励む超世俗的な共同生活の場であると共に、獅子王の如く布教伝道に挺身する拠点でもある所です。古来佛教では、これを僧伽（サンガー）と呼び、伽を略して僧宝と名付け、三宝の一つとして敬つて来たものであり、寺院というものは規模の大小をとわず、僧堂としての風格を堅持していくものです。沙明たる人材は、こゝに養成され、在家信者なる者もまた、これによつて感化され、外護の道心を堅固にして來たものでした。

ところが明治以降、僧侶の妻帯が一般となり、このため僧侶は家族の保護・育成に力をそがれ、寺院の維持、経営、發展に追われる状態となり、寺院の世襲も必然となつて來た今日、何時しか僧堂の面影すら地を払い、僧宝とは非現実的なもの、観念的なものと化し恩愛の絆を断つて立正安國の運動に挺身するといふ不惜身命の人材を輩出するさえ乏しくなつて來ました。これでは祖道地に墮ちたといわれても、返す言葉もありますまい。

そこで祖道を恢弘し、宗風を宣揚せんとするならば、僧宝を現実のものとして取り戻し、僧伽形態による本化の僧堂なるものを、世

## 一国一字

界的立場に立てば少くとも一国一字、日本国内ならば少くとも一県に一字、と建立していかねばなりません。幸いにもその機運が、まづ九州福岡県田川郡の国定公園である上野峠（あがのきよう）誓願の滝におとすれました。鷲峰誌友である福岡県下寺院有志が、こゝに本化僧堂の建設を発願したのです。このため立正大学や身延山大学を卒業した鷲峰青年僧が九州へ下り、こゝに六月一日より一百日間、滝に参籠修行し、あわせて県下寺院檀信徒の有志青少年のために開く夏期林間行学講習会の指導にも当ることとなつていていますが、蓋し僧堂建設の成否は、金錢の如何によるものでなく、一に青年僧の呵烈なる求道・弘法の如何にかゝわつていると申せましょ。

この僧堂は、一般には誓願の滝・行学道場と称せられることになつていますが、彼等の願行が仏意にかなうならば、仏天は必ずや人を動かし「変化の人をつかわして、これがために衛護となさん」という金言を実現されることでしよう。そしてこれを契機として一国一字、一県一字の僧堂陣が、やがて身延を本として形成され、しかも組織に個性の喪失されることなき活潑な法戰が展開されることでしよう。そこに祖道は復興されているのです。

久遠の本仏と人間釈尊 ▲第十六回▽

三  
變  
土  
田  
の  
中  
に

日  
高  
白  
象



31

さて次に、見宝塔品の中の「三變土田（さんべんどでん）」のことについて述べてみましよう。

「三變土田」というのは、多宝塔の扉を開く条件として、多宝塔を中心とする八方空中の国土に、釈尊の分身の諸仏を召還采集せしめるため、その国土が、釈尊の神通力によつて、三度にわたつて清浄な仮国土として変えられた、ということです。

その第一回目は、まず娑婆世界を中心として展開されました。然しそこだけでは、十方分身の中でも、一方の諸仏しか収容することが出来ませんでした。そこで第二回目には、八方それ／＼の方向にくらいする、「三變土田」というのは、多宝塔の扉を開く条件として、多宝塔を中心とする八方空中の国土に、釈尊の分身の諸仏を召還采集せしめるため、その国土が、釈尊の神通力によつて、三度にわたつて清浄な仮国土として増えられた、ということです。

このことは、とりもなおさず、十方法界に散じてい

る釈尊分身の諸仏の数が、如何に龐大なものであるか  
といふ、その天文学的な数量を、実感的に、如実に表  
徴するものであると同時に、その反面、これらの諸仏

を分身していた釈尊が、本仏として如何に偉大なもの  
であるかということ、ならびに三変土田を通して、諸  
仏に対する釈尊の、その主導権の偉しさ、神通力の偉  
さを、暗示するものにはかならなかつたもの、とも  
申せましよ。

## 32

なお三変土田された仏国土の様相については、經典  
中、その第一回目の場合、

瑠璃（るり）を地として宝樹莊嚴し、黄金を纏と  
して八道をさかい、もう／＼の聚落（じゅらく）  
・村營（じゅんによう）・城臣（じょうおり）・  
大海・江河・山川（せんせん）・林藪（りんそう）

の地にしき・宝の網饗（もうまん）をもつて、そ  
の上にかけおゝい、もうもろの宝鈴（ほうりよう  
）をかけたり。  
と述べられており、第二回目と第三回目には、共に  
所化の國、また瑠璃をもつて地とし、宝樹莊嚴せ  
り。樹の高さ五百由旬、枝葉華果、次第に嚴飾（  
ごんじき）せり。樹下にみな宝の師子座あり、高  
さ五百由旬、種々の諸宝をもつて莊校（へしょうき  
ょう）とす。また大海・江河および日真薩陀山（  
もくしんりんだせん）・摩訶日真薩陀山・鐵圍山  
(てつわせん)・大鐵圍山・須弥山（しゆみせん  
）等の諸山の王なく、通じて一仏土となつて宝地  
平正なり。宝をもつて交露（きょうろう）せる饗、  
あまねくその上におゝい、もう／＼の幡蓋をかけ  
けり。  
と述べられていますが、このことは、娑婆世界とは

全く懸け離れた特殊な仏国土なるものが、釈尊の神通力によつて創造されたことを物語つてゐることでは決してなく、實に無差別・平等といふ仏陀の精神を主意として、これを國土の上に象徴し、通一仏土の様相を精神的にうたいあげているのにすぎないのです。

### 33

また次に、三寶土田された仏国土の中、第一回目の娑婆世界においては、  
ただこの会の衆をとどめて、もう一つの天人を移つして佗土に置く。

というように靈鷲山上の会座において、釈尊の説法

を一心に聴聞している以外の者は、たとえ天人であらうとも悉く福して他の國土に置く、ということが述べられており、更に第二回・第三回にわたつて淨化された八方それよりの二百万億那由陀の國土にあつても、地獄・餓鬼・畜生および阿修羅あることなし。ま

たもう一つの天人を移して佗土に置く。  
といふことが述べられていますが、このことは、とりもなおさず、仏界の中には、仏法に皈依していない者は一人もいないということ、ならびにそうした國土にしか、諸仏は出現しないということが、言明されていなければならぬのです。

もとより地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上（以上六道界）・声聞・緣覚・菩薩・仏（以上四聖界）といふ十界の中、四聖界の人々は、既に至心に仏法に皈依し修行しているのですから、それよりの諸仏に親近し、それよりの仏界に攝取されることは申すまでもないことはありますよう。

然し、六道迷界の衆生の中には、仏法に皈依していないものゝ方が、皈依している者の方よりも、その数の圧倒的に多いことは、昔も今も變らぬ有様です。そした無仏の衆生は、如何に富貴をきわめた天上界の人々であつたとしても、所詮、いづれの仏界にも攝取

されないばかりではなく、たとえ諸仏が身辺に来臨したとしても、これを見聞触知することさえ出来ない」と、あたかも木石にも等しいものです。經典では、こうした状態を称して「移して佗土に置く」と述べています。もちろん三麥土田が、釈尊の神通力によるものである以上、この「佗土に置く」ということもまた、釈尊の神通力によるものであることは申すまであります。

て、仏界以外の他土へ移すということは、それ自体、一念三千の教理にも反していることではないか。仏界には天人はいないのか。自我偈の中に我此土安穩天人常五満といふ、或は諸天擊天鼓常作衆妓樂とあるのは嘘なのか」

「いつたようなことがあります。

なるほど、お説の通り、十界は三寶しております、仏界の中にも十界は実在しています。そして自我偈の金言

の如く、本仏釈尊の仏界にも天人は常に充满し、諸天は天鼓をうつて、常に、もろ／＼の雅樂を奏してはいます。然しながら、それらの天人をはじめ、仏界の中

「一念三千の教理の中には、仏界所具の十界」とが説かれている以上、仏界の中にも六道があるとされているではないか。それなのに地獄・餓鬼・畜生をして修羅といふ。そういう三惡・四惡の人々のことならば、まだしも、いやしくも天上界の人々までも除い

ない者も、すべて含めているように思われがちです

が、然しそれは、あくまでも理具の範囲のことでしたから、事相においては決してそうではないのです。

日蓮大聖人の因縁された大マンダラを見ても御観なさい。この大マンダラの中では、十界の衆生は、悉くお題目の光明に照されています。それは仏界の中の衆生が、地獄は地獄なりに、餓鬼は餓鬼なりに、乃至、天人は天人なりに、それゆく人々が、それゆくに法華經に皈依していることを現わしているのです。

また大聖人の大マンダラの中には、特に「總皈命の大マンダラ」という様式もある通り、この中の十界の衆生は、悉く南無の二字を冠して、法華經に皈依していることが、一目瞭然とされているではありませんか。このことは、三愛土田された仏国土においても同様

であつて、この中には、仏法に皈依していない者は、一人としていないのです。いや、むしろこのことを強く言明するために「地獄・餓鬼・畜生および阿修羅あることなし。またもろ／＼の天人を移して佗土に置く」と述べられたもの、と申されましよう。

これを裏返えせば、心より仏法に皈依している者は

たとえ六道の衆生であつても、その身そのまゝ仏界に入ることが出来るということです。

三愛土田の中の第一回目の娑婆世界の当處にあつてわざ／＼「ただこの会の衆をとゞめて」と註し、靈鷲山上、一心に釈尊の説法を聴聞している大衆だけは、他の國土へ移さない由が明かにされているのも、かゝる意義にもとづくものと申せましよう。もちろん、この会座の大衆の中には、地獄・餓鬼・畜生……等々の衆生もいたはずです。罪の輕重を問わず、ただひたすらに仏法に皈依しているものとして……。

### 35

思ふに、法華經による成仏については、波木井殿御返事（文永十年）の中にも、

末代の惡人等の成仏・不成仏は、罪の輕重によらず、たゞこの經の信・不信にまかすべし。

と指南され、また同書に、

法華經の意（こうろ）は「当位即妙、不改本位」と申して、罪業を捨てずして、仏道を成するなりと仰せられている通り、罪の輕重を計り、その罪を消滅して、仏界へ入るのではなく、あくまでも法華經を信ずるという、信の一事によつて、罪の重い者は重いまゝ、軽いものは輕いまゝ、その身そのまゝで仏界に入り、仏果々上にあつて、ひたすら仏道を行じて行くという、その功德によつて滅罪・成仏という大果報が、我れにもあらず、さすけられて来るのです。そうでなければ、どうして末代凡夫の安心立命の道、衆生成仏の直道がある、と申せましよう。罪業を消滅してから後、仏界に入るということでは、到底、凡夫は救われないのである。何故ならば、そういうことは凡夫にとって、とても出来難いことであるからです。

「スバドラよ、世の中の大底の人々は、罪業を滅することによつて、成仏することが出来ると思つてゐる。然し実は、そうではないのだ。煩惱を滅することが出来て、はじめて成仏することが出来るのである」つまり成仏とは、業滅によるものでなく、心の在り方にによるといふのである。この場合の煩惱を滅するという心の在り方は、法華經を絶対信受する、という信の一事に置きかえることが出来ましょ。

以上これを要するに、十方分身の諸仏の来集にそなえるために展開された三変土田という一大瑞相は、宇宙的な規模にもとづく通一仏土の事相を如実に示すのですが、この一大瑞相の中には、仏法を信受する者は、たとえ地獄・餓鬼・畜生……等々の劣悪な者であつたとしても、悉く仏界に攝取されるという攝取不捨の佛陀の大慈悲と、衆生救済の大道が明かにされてい

ると同時に、その反面、仏法を信受しない者は、たゞえ天上界に住むような如何なる高貴な人々であつたとしても、たちまちに仏界より除かれてしまうという俊嚴なる道が、釈尊みずから手によつて明かにされてゐる、といえるのです。

なお、こゝで失念してならないことは、三変土田といふ一大瑞相そのものが、そのまま本門八品へ移行して親心本尊跡に。

本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士は上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、万民の大地に處して雲闇月卿を見るが如く、十方の諸仏は大地に處したもう、迹仏迹土を表するが故なり。

と示されている通り、久遠実成の本師釈迦牟尼仏の主宰する娑婆世界の上空に、多宝塔を中心として、諸

仏の采集を通して、その十方淨土が悉く集約され、諸仏の「三つの放棄」「三つの誓願」とあわせて、

今、本時の娑婆世界は、三災を離れ、四却を出でたる常住の淨土なり。仏、既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化もつて同体なり。

そして、こゝにもう一度ぶりかえつてみなければならることは、三變土田という一大瑞相の悉くが、いまだ大衆から應身仏とばかり思われている釈尊一人の神通力によるものであつた、ということです。

釈尊一人の神通力によつて展開された三變土田、その中には、やがて明確にされて来る本仏釈尊と十方分身の諸仏との関係、ならびに娑婆本土と十方淨土との関係が秘められ、釈尊に皈依する以外に衆生成仏の道はない、といふことも暗示されていると申せましよ。

日蓮大聖人身延入山の聖跡を慕いて　ヘその二▽

# 東京・鎌倉・身延擊鼓行脚紀行

川 島 本 良

文永十一年三月二十六日、沢山の弟子、檀越に迎えられた大聖人は、北国寒山佐渡ガ島より、思い出多きこの鎌倉にもどられたのでした。一日千秋の憶いで、この日を待ちわびた弟子達の感慨は、いか計りであつたことでしょう。

一緒に腹切つてお伴をすると泣いた四条金吾、きょうは嬉しさに涙して、童のように顔をくしゃくしゃしたことでしょう。

大聖人は、將軍頼朝が國家鎮護のために建立した夷（えびす）堂に、しばらく休まれることになりました。門前の夷橋を渡ると、すぐ前方には、つい先年まで庵を結



△由比ヶ浜にて筆者▽

んだ松葉ガ谷がございます。松の  
緑は春の日を一杯に浴びて、青く  
美しく、大聖人を訪ねる老若男女  
の目に映つたことでしょう。

四月八日、幕府に召された大聖  
人は平頬綱と面会し、蒙古来襲の  
近いことを説き、唯一の救國の道  
は正法に帰依するの他はない、  
三度目の国家諫諫されたのでした  
しかし、大聖人の正法帰依という  
信仰的立場からの救国策と、頬綱  
の政治的、軍事的見解との溝は少  
しも狭まることなく、またまた聞  
き入れられずに終るのでした。

いつの頃でしようか、大聖人が  
夷堂にご滞在を聞いて、訪れた父  
子の姿がありました。父は法華經

の信者で行光といい、子は十一才  
五郎と名乗りました。後に日本一  
の刀剣づくりと親孝行の手本とさ  
れる五郎正宗は、少年時代に日本  
一の法華經の行者から教えを受け  
正宗の良き名を頂戴したのでした

幕府は、弘通の免許、愛染堂の  
別当、美田一千町歩の寄進を申し  
だし、横越は所領の寄進と新寺の  
建立を申しました。そして弟  
子達は、やつとお会いできた喜び  
を少しでも永くたもち度いと願つ  
て、愛別離苦を語り会いました。

す。

後に、身延入山の理由を「三度  
諫めて用いすんば、山林に身を交  
る」との中国聖賢の故事をして、  
人々に語られてはおりますものの  
それはあくまで表面的な弁解に  
りませんでした。

五月十二日早晩、師子奮迅の法

華經の行者日蓮聖人は、俄かにそ  
の師子吼を収めて、鎌倉を去られ  
たのであります。偽政者と名僧  
知識の充満する法敵の牙城鎌倉は  
またご生涯に最も永く住われた所  
でもあり、幾多の弟子、檀越をあ  
とに残さねばならぬところでもあ  
りました。更に再び帰らじとのご  
覚悟があつてみれば、思いは一層  
切なるものがあつたことと思いま  
す。

華經の行者日蓮聖人は、俄かにそ  
の師子吼を収めて、鎌倉を去られ  
たのであります。偽政者と名僧  
知識の充満する法敵の牙城鎌倉は  
またご生涯に最も永く住われた所  
でもあり、幾多の弟子、檀越をあ  
とに残さねばならぬところでもあ  
りました。更に再び帰らじとのご  
覚悟があつてみれば、思いは一層  
切なるものがあつたことと思いま  
す。

ほとんど人跡未踏に等しい、甲斐の幽境に、恩愛の情を絶つておもむかれた、そのご真意は側近の弟子にも語られず、一人心中に留めての出発がありました。

後の四条金吾への消息文中にも「山林に世を遁れ、道を進まんと思ひしに、人々の言葉様々なりしかども、旁（かたがた）、存する旨ありしによつて当國当山に入つて……。」と、旁、存する旨、とのみ申されると、留まつております。

隨行の者は、日興・日向・日重

日持・日進・久本坊・熊王丸など六七名で、旅装も蓄素を極め、その姿からは、およそ國家諫曉の大導師を想像することはできなかつたことでしょう。

今は觀光寺院としてのみで見る力さて私達行脚布教隊は、四月一日朝、住職貝山僧正、中盛社長他數名の見送りを得て、東身延本覚寺を後にしました。再び法鼓は街頭に轟き、玄題は四椎上下に響き流れるのでした。大通りを下り、露座の大仏前を左に折れると、道路に面した右側に、四条金吾の家敷跡があります。

まもなく上り坂にかかり切通しを進むと右手に木立ちに囲まれた極楽寺が望まれました。榮枯盛衰その昔、極楽寺良觀の名声は天下に轟き、生き仏と称讃されました

が、大聖人は、正法を捨て人心を惑わす偽善者と破折されました。文永十一年五月十二日。弟子・檀越は別れを惜んでこの極楽寺の切通しまで見送つたことと思われます。三年前の秋の夜には、囚人として馬上に過ぎしこのところ四条金吾が後を追つて馬の口に取りついたのもこの辺りです。坂の上には偽善者良觀が根城を構えておりました。ここからの鎌倉をみての大聖人の感慨は如何であつたことでしょう。

私達は大聖人のご心中を憶いつつ極楽寺坂を下りました。すると

突然道が切れるかと思われるその前方に、銀色に輝く大海原が迫つて、一同の息を一瞬止めるかに思われました。ここからは海岸線を進まねばなりません。しかし陽光は強く、潮風は冷たく、本当に心良い行進となりました。空と海とが交差して無限の距離を象徴する水平線、何もかもを含み尽す比類なき抱擁力、千年万古一秒の断絶もなく陸を打ち続ける波、まさに海は、大自然は、雄大かつ偉大でありました。自然を支配するなどとは、なまじ知恵ある人間の誇大妄想に他なりません。

海をみつめているだけで、人は多くのことを学びます。寄せては

「河の水は流れ流れて、永劫止ま

返し、返しては寄せる波は、寄せるという肯定と、返するという否定が同時に存在するということをまた大河・小河は全て大海に流入し、全ての水を一氷に集めて微塵も漏さず抱擁し、一味の海水と化することは、世の万法が全て一法に帰結するということを、私達に教えてくれているのです。

俳聖芭蕉が晩年になつてから奥州路に旅立つことも、自然に坐ぶといふことありますし、紙につづりし俳諧は、自然と自身との一如の出来事であり、時間を征服することが煩苦を消滅せしむることであるということを、ヘツセは河に学んだのでした。

ることを知らない。而も流れは

永久に眼の前に、いつも実在して、而も永劫にかけて同じ流れなのだ。而もそうして刹那ごとに新しく生々として流れている」

時間は存在するものでないということを、また、過去・未来という

存在はなく、一切は今ここに実在しているということを、そしてあらゆる苦惱は、あらゆる恐怖は、時間の上の出来事であり、時間を征服することが煩苦を消滅せしむることであるということを、ヘツセは河に学んだのでした。

は片瀬龍口寺が望まれる七里ガ浜の磯路を行脚隊は進みます。

「日連といひし者は、去年（文永

八年）九月十二日、子丑の時に頸はねられぬ」

大聖人のご生涯に、龍の口の頸の座こそは、内には本化上行菩薩の自覚を、外には法華經の行者はかくあれとの真偽を、決定的にしたるものでした。刑場龍の口を、「仏土に劣らざる所」といい。

「日頃、月頃、思ひたりつる事は是なり。幸なるかな、法華經の為に身をすてん事よ。臭き頭をはねられば沙に金をかへ、石に珠をあきなへるが如し」

また、四条金吾に、「不覺の殿ばらかな、これほどの

悦びをば笑えかし」

とまでに申されました。正に一命の果てんとするその刹那に、前世

誇法の滅罪と来世成仏の確信に法悦の涙をされた大聖人、しかしそのご心中を知ることなき、弟子、檀越は次々と退転して行きました

私達は何という因縁か、この聖地を擊鼓行脚し、求道の旅を続けております。さすれば私達の過去

の時は、わするるなるべし」

今生こそは大聖人の誠を堅守せねばなりません。身命を期するの大決定心を起さねばなりません。

世には、（悠久の過去世には何度も法華經に值遇したのでありますようが）七百年の大聖人ご在世に切角教えを受け乍ら、信することの苦痛から退転して行つた、弱い

信者の一人ではなかつたであろうか、と思われてならないのです。

「我れ並びに我が弟子諸難ありと

も、疑ふ心なくは自然に仏界にいたるべし。天の加護なきを疑わされ、現世の安穏ならざる事をなげかざれど、我が弟子に朝

ノ教へしかども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならひは、約束せし事を、まこと

する舞天橋の入口に出ます。そこ

にはまぶしいほどの春光の下に、

老若男女が潮風を満喫しておりました。私達は広大な海洋に魅せられながら、海岸線を進みます。

鎌倉から酒匂までの大聖人の足跡は判然としません。この海道か或は他の二つの旧道なのですが、私達は大聖人もまた海をみつめつつ歩まれたものと考え、波打ち際を過ぎました。

江の島を少し過ぎると遙か彼方前方に、ボツンと一つ小さく建物が目に入りました。周囲はぼけてその建物だけが白く光つて見えるのは、割と大きな建造物にちがいありません。

「一人の男が大勢を引きいて長途

の旅に出ました。目的地はとて

も遠いのですが、その中間頃で皆は疲れ切つて一步も進めなくなりました。男は皆の心を知つて、通力をもつて砂漠の中に巨大な白亜のまぼろしの城を出現せしました。飲物も、果物もやわらかな寝床も用意されました。皆はそわ目的地だと狂喜して、飢と、乾きと、疲労を癒し数日を過したのです。すると男

早めたのでした。

今、彼方に望む建物は、そのままぼろしの城であると思いつつ歩を

唱導の男とは他ならぬ仏陀その人であり、追従の皆とは私達衆生であり、目的地とは法華經であり、まぼろしの城とは方便の諸經である、と説いているのが、法華經第七章化城喻品のおはなしであります。

勇躍歡喜して、男信じ、また旅

立つたということです。」

その道は時間的空間的距離ではなくて、実に私達の一念の在り方に他ならないのです。百邁遍のお題目を唱えても心が化城に在つてはなりません。

目前に迫つた白亜の化城は、実はホテルの高層建築でありました砂浜で小休して、大磯への撃鼓を続けます。大聖人は一日にして小田原酒匂川のほとりまで進まれましたが、私達はこの日の四時過ぎに鎌倉と酒匂の中間、東小磯の妙昌寺に一夜の縁を結ばせていただいだのです。

妙昌寺山門を入ると住職山崎海弘上人が心良く迎えて下さいました。早速法味を言上し、旅装を解

いて、上人の体験談の数々を伺うこととなりました。

井中の蛙であつた私達にとつて行脚中、在々々々に聞いた法門こそ、実に大きな収穫でございました。

その夜は足の治療と、きょう一日を振り返つての尽きない話に時を忘れましたが、皆の心に何か強いつかりしたつながりのできていくのを感じたのでした。実践の中に自然に生れゆく友情と団結、これに勝る強いものはありません

翌四月二日折から的小雨の中を奈良県 藤原祥皓  
〃 立正靈山会  
兵庫県 川島本良  
東京都 花房千代  
日高江里子  
鷲峰賛助会費とは本誌の発行・人材養成・布教活動という鷲峰青年運動に対して精神的・経済的両面より参加して、毎年三千円を志納される方です。本年の維持発展のため贊助会費の貢献するところ誠に甚大です。こゝに本年度の志納者御芳名をかゝげて感謝の意を表します。

## 一昭和四十二年度 鷲峰賛助会費 志納者御芳名

# 忍 徒 十 一 年 目 の 唱 題

人間礼拝と家庭の成仏 ヘその二▽

日 高 白 象



## 貫名円徳上人の道風

も等しき信仰体験を語り出したお  
婆さんは、名を出口りつよさんと

盛な法華經信仰をつらぬいた家で  
した。

## 福岡県豊前地区における田川の

街頭布教がすんだ夜、香春の蓮華  
寺において開かれた座談会の席上  
いゝ、今年六十九才ということと

もとよりその信仰は、蓮華寺の  
中興開山とうたわれた貫名円徳日

寺において開かれた座談会の席上  
「わたしの一生の一大事を聞いち  
おくれ」

いゝのですから、蓮華寺からおよ  
そ十里ばかり離れた所です。

りつよさんの実家は、姓を白石  
十五才で遷化されるまで、生涯、  
妥協追従も許さぬ峻烈な信行をつ

しながら、自分の一生の一大事に  
と方言まる出しで、身を乗り出

といゝ、代々蓮華寺の檀家で、強

らぬいた偉大なる布教家でした。

かの博多湾頭、東公園にそり立つ日蓮聖人の大銅像、これを建立したのは佐野前勵日菅上人として、宗門の人ならば誰一人として知らぬ者はないほどですが、日菅上人をたすけて銅像建設運動に獅子奮迅の努力をした四天王の中に蓮華寺の貫名日淨上人がおられたのです。

当時、銅像建設は困難をきわめました。勸財布教に行けば、同門の中からさえ、山師・ペテン師インチキ・キチガイとのよしられ石・瓦をなげつけられるばかりでなく、泊る宿も断わられ、旅費にも窮するといったような状態も、再三のことではなかつたそうです。こうした難題を克服し、日菅上人を中心として四天王が一身同体となつて、遂に世界第一の大聖人の大銅像が完成されたのでした。

これが完成した暁、今でこそ、ここしきに発願者の法徳はたゞえられていますが、完成を見るまでの苦心というものは、文字通り言語に絶するものでした。

貫名上人としても、東奔西走に明け暮れて、自坊蓮華寺をかえり見る暇さえ殆どない、といつたような状態でした。

こういう逸話が残っています。それは蓮華寺の現住職松代円心上人、長男である義円上人から、曾つて聞いていたことなのですが、

「ハイ、これだけで……」

銅像建設の運動中、たまく上人が、自坊に帰つて来られていると知つた当時の檀代たちが、鳩首して、恐るべくお願ひに出ました。

「お上人さま、銅像建設も結構なことです。が、こんなに何時もお寺を空けてばかりいられては、檀家の者が困ります。どうか住職ならば住職らしく、お寺を守り、檀家を譲つた上で、銅像建設をやつて下さいませんでしょ?」

「馬鹿者々」

大喝一声、上人は持つていた。

あの太いキセルの雁首で、力まかせに総代の頭を、ゴツンとぶんなくつてしましました。

たまつたものではありません。

なぐられた総代は、白眼をむいてひっくり返つてしましました。上人は更に、声を励まして叱咤しました。

「銅像建設は大聖人の高恩に報いひいては明治の困難を開拓して、全世界に立正安國の大道を示そうとするものなのだ。大聖人あつての日蓮宗であり、大聖人あつての蓮華寺だ。然るに大聖人に対する報恩の大恩も忘れて、蓮華寺を守

れ、檀家を離れとは何事だ。本末顛倒も甚しい。それでもお前たちは寺の総代として、お題目を唱えている者といえるのか。顔を洗つて出直して來い」

総代たちは脇をつぶし、冷汗をたらしながら、ヒキガエルのように、ひれ伏してしまつたというこ

とです。

この一班をもつても推察出来るよう、上人の檀信徒教育は徹底したものであり、常々「念佛無間・釋天魔・真言亡國・律國賊」という四個の格言を標榜するという

折伏主義の布教家であつたのです。豊前田川地区は、今でもそうですが真宗王國といわれ、念佛の

牙城といわれたほど、念佛信仰の盛んな地方でした。

こうした地域だけに、上人の他宗に対する折伏は峻烈をきわめて出直して來い」

「法華の家から嫁をもらうな。嫁が題目を唱えて、婚家先きから一族まで改宗させてしまう」

という評判が立つてはど

す。思うに、その評判は單なる流言ではなく、事実そうしたことが幾度かあつたため、このような評判が、この地方一円にしみ通るに至つたものでしょう。

出口りつよさんの実家である白

石家が、代々蓮華寺の檀家であつた関係上、貫名円徳日淨上人の嚴

しい訓陶を直接にうけ、子から孫へと、親子三代にわたる強盛な信仰をつらぬいたのもまた当然なことであつた、と申されましよう。

### 十一年ぶりのお題目

りつよさんのお母さんは、チニノさんといふ、幼少の頃より法華經信仰をたゞきこまれ、成人して出口作松さんと結婚しました。

出口家は一族をあげて、代々強

盛な念佛信仰の家でした。然しねエノさんは一向に法華經信仰をせず、夫の作松さんや男の龍平さん、姑のりつさんの前であろうも、禮せずに題目を唱えていました。

当然、こゝに信仰の対立・葛藤が起りました。家中の者から、「念佛の家へ嫁に来た以上、題目をすてゝ念佛を唱えよ」と責められました。檀那寺の住職がやつて来て、憎くしげに意見しました。親戚中の人たちまで集つて来ては、のゝしりました。

「法華經を信する者は癪病患者だろして、いたことから、法華經信仰を憎む人々によつて、ちが、親兄弟にも見捨てられ、身を乞食に落してまでも、法華經信仰で救わるべく、群をなしてたむろして、いたことから、法華經信仰を憎む人々によつて、

「法華經を信する者は癪病患者だ」

「腐れ者だ。腐れ者しか法華經は信じない」

と悪口されていたのです。

然しねエノさんは、どんなに反

対され、悪口され、折檻されても、「身は一代、信仰は三世。今生どんなに苦しいことがあつても、お題目は唱えねきます。そして、あなた方が念佛を信じて、来世無間地獄に落ちた時、今生のえにしによつて、却つてあなた方を導きま

し  
う

と筆もひるむことなく、ますます熱心にお題目を唱えたのです。時にチエノさんは、まだ二十二・三才という若さでした。

何と強盛な信仰でしよう。世的一般の婦人の場合、結婚すれば、その家の家風に従つて、信仰も、それにならつてしまふものでありたとえ強固な信仰をもつているようではあつても、新婚早々に夫や舅、家族中の者や親族一党の人々から、信仰について、やいのやいのと言わるれば、心には自分の信仰が正しいとは思つていても、つい周囲に妥協して、信仰を改めがちなものなのです。

然し、チエノさんの信仰は不退転でした。そして念佛一族の中にあつて、たゞ一人、うら若き新婚の嫁の身でありながら、泰然として信仰をつらぬいたのです。

おそらく当時のチエノさんの胸中には、連日、周囲の人たちから責めらるれば責められるほど、貴名円徳上人の激励する大音声が、声なき声として響いていたことで



△貫名円徳上人（大蓮院日淨聖人）のお墓の前で

しよう。

また如何なる法難にも屈しなかつた七百年前の、日蓮大聖人の姿なき姿が、彷彿としていたことでしよう。

そして、その声、その姿こそ、チエノさんの唯一の味方であつたことでしょう。

然し、ついに最後の時が来ました。離縁ということでした。それは怒りに猛つた親族の側から強硬に主張されました。

「明日にでも追い出してしまえ」

というのです。さすがに夫や舅姑たちは、

「これまで、しなくても……」

とは思つても、一族の怒りには

抗しきれないふうでした。

その夜、舅の龍平さんは、姑のりつさんや、夫の作松さんと相談した上、チエノさんを呼びよせてしんみりと語りました。

「如何に信仰が違うからといっても、縁あればこそ嫁としてもらつたばかりのお前を、またすぐに追い出してしまうということは、まことに忍び難い。また我が家としても世間体のよいものではない。

然し、私たち年寄り夫婦が、まだ生きている間だけは、信仰するなどいうのではない、信仰してもよいが、お題目を「では唱えずに心の中だけで唱えよ」ということにしてはもらえないか」

でに責められると、当主の私としても、一族の意向に従わないわけには行かなくなつて来る。

ところで、どうだろう。私たち

か」「チエノよ、そうしようぢかない

と口を添えました。チエノさん

もないが、私たち二人が目をつぶつて死んだ後は、お前がどんなに大声をあげてお題目を唱えようと

も、また一家をあげて法華經に改宗しようとも、私たちには異存はない。

チエノさんは、真実味のあふれる言葉でした。夫の作松さんも、

は決心しました。

「では、仰せの通りにさせて頂きます。これからは心中でお題目を唱え、口がさけてもお題目の声は出しません。」

然し、その時が来たら、一家をあげて改宗し、阿弥陀さまの本尊をはずして、三宝さまを勧請させてもらいます。」

三人は固い約束をかわしました。八方円満に解決される曙光がみえたのです。然し、それ以来、チエノさんの日常には、朝に夕に合掌礼拝する姿こそ見うけられても、一辺のお題目の声すら聞かれなくなりました。

間もなく、若夫婦には娘の子が

生れました。姑のりつさんの名に

あやかつて、りつよと名づけられました。この娘こそ今年六十九才になるりつよさんなのですが、りつよさんが八才になつた年、龍平

さんが亡くなり、つづいて翌年のにはりつさんが亡くなりました。

両親があいついで他界したこと

は、大きな打撃でしたが、然し約

束の改宗の時は來たのです。

その翌年、則ち、りつよさん

が十才になつた年に、チエノさんは出口家の親族一同に集つてもら

い、夫の作松さんを証人として、一家の改宗を告げたのでした。

人々は皆、愕然としました。侮

は、つかみかゝらんばかりに怒つた者もいました。もとより覺悟し

ていたチエノさんは微動だにしませんでした。両眼には熱い涙が輝いていました。

その涙こそ、嫁に來て以來、何と十一年もの間、たゞ心中で唱えて、口にはおくびにも出すことの出来なかつたお題目が、今こそ大音声に唱えられるという喜びの涙であつたのです。

やがて啞が始めてものを言い出すかのように、チエノさんの口から、十一年ぶりのお題目の声が、静かに流れて来ました。

「南無妙法蓮華經／＼……」

△△△

# 初恋にやぶられて

薬科大学今野俊彦

## 雨の山門

私は、身も心もヨレヨレになる

した。

昭和四十年六月の第三日曜日、  
その日は雨でした。夜半から降り  
出した雨が、朝になつてもやまず  
なおシトシトと降りつづいていま  
した。それは、あたかも私の心の  
中に降る雨でもあるかのようでし  
た。

ほど、すつかり雨にぬれしほれ、  
さまよう歩みにまかせて、何時し  
かお寺の山門をくぐつていきました  
暗い、しめつた我が心の中に、一  
縷の光明を求めて…………。

そこは東京と千葉の県境に流れ  
る江戸川の、岸辺の台地にそびり  
立つ日蓮宗本山・真間の弘法寺で  
した。

自分自身では、どうすることも  
出来ない今はの心の懊惱を救うも  
の、それは巷の何処にも見出すこ  
とさえ出来ず、曾つて母につれら  
れて参拝したことのある此のお寺  
を、古い記憶の中にたぐりながら  
古色蒼然たるその山門をくぐるこ  
とによつて、その中にたゞよつて



いるであろう千古の神祕にふれる  
以外はない、と思うほど身も心も  
追いつめられていたのです。

本堂へ登る石段は、雨にぬれて

いました。私は静かに登つて行き  
ました。然し、そこで待つていた  
ものは、名刹にたゞよう神祕のム  
ードではなく、天地にもとづろけ  
とばかりにも唱える明朗豁達な唱  
題修行でした。

教いはお題目にあり、このお題  
目を大音声に唱えるという行為そ  
のものにあつたのです。  
それからの私は、暇あるごとに  
いや万障をくりあわせて、毎日の  
よ上にお寺へ通いました。そして  
本堂に独坐し、うつせきした苦惱

はりきげんばかりの懊惱を、お題

目と共に吐き出し、お題目に托し  
て無方の虚空へと散じて行きました。

それは初心の者とはいえ、唱題

行本来の在り方からみれば逸脱し  
たものであつたかも知れません。

然し当時の私としては、それが唯  
一の教いであつたのです。家族の

者が私を称して、

「この頃、ずいぶん人間が変つて  
来た」

と言い出すようになつたのも、

その頃のことでした。

然し、變ろうとして變つたので

はありません。たゞ救われたいと

願う一心の唱題修行が、何時しか

私を変えて來ていたのです。

雨の日の弘法寺の山門をくぐつ  
た時から、一年有半もすぎた今年

の春三月下旬、日蓮大聖人の身延  
入山の聖路をたどる東京・鎌倉・

身延間の擊鼓行脚隊が、立正大学  
を卒業したばかりの数名の青年僧  
によつて組織され、真間の弘法寺  
を起點として行動が起される時、

その一行の中に、在家の学生なが  
らも、私も進んで参加させてもら

いました。

前後十二日間もかゝつた擊鼓行

脚には、想像もされなかつた苦難  
が連続していました。然しその苦  
難を一步ずつ克服しながら、毎日

毎日、腹一杯お題目を唱え、力一

朴法鼓をうつということには、言  
い知れない感激がこみあげて来、  
△法悦とは、こういうものか？  
と思つたくらいです。

この時の身延山参拝は、私の生  
涯はじめてのことでした。連日の  
ホコリにまみれ、血豆だらけの足  
をひきずつて、西谷の祖廟にぬか  
ずいた時の感動は、到底、筆舌に  
つくすことは出来ません。

行脚隊一行と共に大聖人の御廟  
塔に向つて、感激にもせびながら  
至心に太鼓をうつてお題目を唱え  
た時、私の胸中、走馬灯のように  
想い起されたものは、ほかならぬ  
△私をしてお題目へ導いたものは

がれたまゝ、あたかも夢遊病者の  
如く、真間の弘法寺の、梅雨にけ  
むる、あの山門をくぐった時のこ  
とでした。  
思えば、当時の私と、今の私と  
では、わずか一年有半の間に、想  
像もされないほど、すっかり変つ  
ていました。  
△私は変つた。生れ代つた。お題  
目によつて蘇生させられたのだ？  
という思いは、祖廟にぬかずい  
ている中、はじめて自らの自覚と  
して、しみじみと感ぜさせられた  
ばかりでなく、

大学のコーラス部で  
私の法華經入信の動機となつた  
ものは、申すまでもなく私自身の  
懊惱にほかなりませんが、その懊  
惱は、ごくありふれた青春時代の  
はかない初恋にはじまつています  
そしてこれを「愛の無常」とい  
うのでしよう、やがて身にしみて  
知られた「愛の限界」と「悲し  
き別離」……それによって私の人  
生は、大きく変えられて行つたの  
です。

昭和四十年の六月、いまだお題目  
の尊さも知らず、苦惱にうちひし  
と思う時、雨の山門をくぐるこ  
とです。

初恋の人、その人の名は、仮に  
A子さんとしておきましょう。彼  
女との出合いは、昭和三十九年の  
四月、志望していた薬科大学に無  
事入学して間もない頃、学校の教  
室で、たまたま同じ机に、隣りあ  
わせて席をとつたことによるもの  
でした。

この偶然が、きっかけとなつて  
それ以来二人は何時も同じ机に、  
肩をならべて坐るようになり、学  
校では、誰よりも、日々に親しく  
なつて行きました。

間もなく二人の間に、同じクラ  
スのB君やC子さんも加わつて来  
て、何時となく親友四人組という  
形が出来て来ました。

B君やC子さんの在籍しているコ  
ーラス部に、私も入りました。も  
とよりコーラスが好きであつたわ  
けでもないのですが、入部をさせ  
てくれた先輩の人間味に、すつ  
かり魅せられてしまつたからです  
「人生意氣に感ず」

という諺がありますが、高く理  
想をかゝげて、純粋に突進して行  
くことは、たまらない魅力です。

私は、こうした人間に、ほれつぼ  
いのかも知れません。そして一つ  
のことに没我的になつて行くのも  
私の性情なのでしょう。

コーラスの入部にしても、また  
A子さんも入部してもらうことに  
なり、コーラスを通して交際する  
機会は、ますます頻繁になつて行  
きました。

仲のよい四人は、毎日、何時も  
一緒に行動を共にし、暇さえあれ  
ば人生論をたかわせていました  
それは学生に限られた夢であり空  
論であつたかも知れません。

然しどもかくも四人が何時も顔

をあわせるということ、たゞそれだけでも楽しいことであり、張りのあることでした。

四人の性格といえば、B君とC子さんが最も活発であり、ともすればB君でさえ、C子さんにありまわされ、私も巻き込まれてくらうほどでした。

それにくらべるとA子さんは、むしろ無口すぎるといわれるほどであり、四人の中では何時も静かに話しを聞いていたのが常でした。そうした彼女の姿に接するごとに、私自身、秘かに心あたまるものを感じていたことは事実です

大学での勉強そして試験、コー  
ラスのレッスンそして発表会、等

々に追われながら、またよく間に大学生活の一年目はすぎ、二年生の冬には、寒む空にオーバーの襟を立て、彼女を家まで送りとどけることが、その頃の私の日課となつていました。

一人だけでいる時、互に語りあうことは、もはや抽象論的な人生観や世界観ではなく、お互いの生き立ちや家庭環境、そして将来に対する具体的な生活方針、等々のことでした。

それには、秘かに愛しあう者のみに許されたことであつたかも知れません。

夜、家に一人でいる時は、今し  
がた彼女と別れたばかりであり、

明日もまた学校であるということ

に、思慕の情ばかりがつもつて、部屋の中をオロ／＼したことあり、或は学校の帰途、やつと二人

きりになることが出来た時、同時に一人の胸の中から吹き上つて来た、清くも激しい感情に、自分がラグキリと驚いて、正に顔を見あわせては、クス／＼と笑いころげたことも、しば／＼でした。

然し、それが「愛の限界点」であり、それ以上に二人の愛が、发展してはならないものであろうとは、神ならぬ身の、夢にも気付かないことであつたのです。

へつゞく

立正安國と王仏冥合 ▲第六回▼

# 転輪聖王と統一戒壇

日 高 白 象

15



弘安五年四月転輪聖王と国神を勧請した大マンダラ  
△京都本隆寺藏△

事実、三大秘法鈔が後世の偽作であり、しかも大聖人の本来の思想に反するものであるならば、四百余篇の御遺文中、本門の戒壇という言葉は散見されても、統一戒壇に対する具体的な説明を表明された御遺文はもはや何處にも見出すことは出来ないのでから、こゝに、

「大聖人には、国立戒壇というような統一戒壇思想は



全く無かつたものであり、本門の戒壇というものは、本門の本尊を仰ぎ、本門の題目を受持する当所、ということにすぎないものである。従つて大聖人におかれても、御遺文中、本尊と題目を明かにしさえすれば、あえて戒壇について言及される必要はなかつた。そのため、本門の戒壇という名字だけを記しておくことに留められたのである」

「といったような考への起つて来るのも、蓋し当然なことではありますよう。

こうした考へは、國家統一戒壇の建立をめざして、天皇や將軍をはじめ諸大名、等々の名門、權勢に接近して行つた、これまでの國謫運動者のはんどんの人々が、動機はともあれ、結果的には、何時しか立正安國という法主圓從思想より、輪翼的王仏冥合思想へと転落して行つた宗門の歴史的動向をありかえる時、更にう。

それでは大聖人には、統一戒壇建立という思想なるものは、全く無かつたのでしょうか、觀心本尊鈔の中に示された一尊四士本尊様式は、戒壇本尊を密釈したものではなかつたのでしょうか。

## 16

この問題に関して、連想せしめられることは、大聖人自身、上行菩薩の再誕という自覺を公表された、その公表の仕方であります。

もちろん日蓮門下の人々は、誰一人として大聖人が本化上行菩薩の再誕者であらることを疑つてゐる者はありません。然し後世の偽作御遺文はともかくとして、確實な真蹟御遺文の中には、大聖人みずから上行再誕を公表された文章は、何處にも見出すことは出来ないのであります。

たとえば文永八年十月二十二日付けの寺泊御書（真臘中山聖教藏）の中には、

日蓮は八十万億那由他の、もろくの菩薩の代官として、これを申す。彼のもろくの菩薩の加被をうくる者なり。

というよう、「本化地涌の菩薩の代官」といつた程度の表現しかしておらず、また開目録の中であつてさえ、しばく。

我が身、法華經の行者にあらざるか。

というような消極的な表現しかされていないのです

もとよりこの言葉は、むしろ強い反語であつて、

「我れこそ法華經の行者である。上行再誕といわるべきである」

といふ密意あふれるものではあります。然し、たとえ真意はそうであつたとしても、言葉としては明確に宣言されたものとは申せません。いな真蹟御遺文の中には、こうした宣言は何處にも見出されないので

す。  
それは大聖人自身、わざく宣言される要もない、

と思われていたためでもあります。或は謙虚な御心持から、あえて宣言されなかつたためかとも思われますが、このため後世の門人たちによつて「大聖人こそ上行菩薩の再誕である」ということを、明確に宣言した御遺文が必要とされ、その心要に応じて、こうした御遺文が偽作されるに至つたのです。

然しそれは、如何に大聖人の内意を体したものであつたとしても、偽作であることには變りなく、従つて大聖人自身の宣言とは申されないであります。

では上行再誕の自覺は、大聖人一代、遂に何處にも発表されなかつたのか、という問題が起つて来ますが、幸いにも此處に、それに答える得る、たゞ一つの文証をあげることが出来るのです。

それは大聖人が、身延に入山された文永十一年の、年の暮れも迫つた十二月に因縁された真蹟大マンダラの中にしたまられていた讀文にほかなりません。

この大マンダラは、保田の妙本寺に格護され、その

写しは身延山久遠寺の祖師堂の大聖人の御尊像の後

背にもかゝげられており、また百二十三幅の大聖人の真蹟大マンダラを網羅した御本尊集の中には、第十六篇として収録されているのですが、その譜文には、次のように示されています。

文永十一年太歲甲戌十二月 日

甲斐の國、波木井の郷、山中に於いてこれを図す  
大覺世尊御入滅後、二千二百二十余年を経歴すといえども、それ月（インド）・漢（中国）・日（日本）三カ国の間、未有の大本尊なり。或は知つてこれを弘めず。或はこれを知らず。我が慈父、  
仏智を以つて隠してこれを留め、末代のためにこれを残したもの。後五百歳の時、上行菩薩、世に出現して、始めてこれを弘宣す。

が明白にされましよう。

思うに、真蹟御遺文の何處にも、それと宣言されていなかつた上行再誕の自覚は、実に大マンダラの譜文の中に、既に明確に発表されていたのです。

そこで、これを同様に、真蹟御遺文の中に見出すことの出来なかつた大聖人「心中の統一戒壇思想なるものもまた、大マンダラの中に見出しが出来るのではないか」と思えるのです。

## 17

今、御本尊集をひもどいてみると、こゝに集録されている百二十三幅の真蹟大マンダラの中、転輪聖王を勧請した大マンダラが、何と五十一幅もあることに気が付かれます。

もとより原文は漢文ですが、この讀文によつても大聖人が、明かに上行菩薩として一圓浮提未曾有の大マンダラを因類され、本門の大教を宣布させていたことが、転輪聖王というように、その呼称は異つてはいますが

然し、一切の国王の中でも最も勝れた国王であり、むしろ一国の王というよりも世界的な場に立つた大王であり、しかも仏法によつて四天下（全世界）を、物心両面より統一するという聖王であることには変わりはありません。

そして転輪聖王の出現こそ、釈尊在世以来、仏教徒の等しく願つていたことでもあるのです。とりわけ立正安國を標榜された大聖人の、祈りの対境である大マンダラ中、転輪聖王の勧請されるのも、蓋し当然のことと申されましよう。

次に、転輪聖王を勧請している五十一幅の大マンダラを、その呼称と年号によつて分けてみれば、

世界四輪王 文永一幅

四輪王 文永二幅、建治五幅

輪王 建治一幅

四輪 建治一幅

転輪王 建治一幅、弘安一幅

転輪聖 弘安二幅

転輪聖王 建治五幅、弘安三十二幅

というよに類別され、終じては、

文永年間 三幅

建治年間 十三幅

弘安年間 三十五幅

というように年代が進むに従つて、勧請の数も圧倒的に増えて行つてゐるのみならず、四輪・輪王・四輪王・転輪王・転輪聖といつていた呼称、転輪聖王といふ呼称に整束され固定して行つてゐるのです。

このことは、大聖人の転輪聖王に対する関心が、年と共に、より強く、より深まつて行つたことを物語るものにほかならない、と申せましよう。

それと同時に、全世界における正法広布と統一戒垣建立に対する悲願もまた、より強くなつて行つたことを証するもの、とも言えるのです。

何故ならば、正法を外護する転輪聖王の出現によつ

て、正法広布による世界宗教の統一も促進され、ひいては、このことによつて世界統一戒壇の建立も、実現することが可能となつて来るからです。

大聖人は、法華經における本仏釈尊の仏勅を体して常に一天四海皆帰妙法・通一仏土の達成を期し、その日の一日も速かならんことを悲願して、全生命を投じて来られました。そしてその悲願と情熱は、晩年になればなるほど、折からの蒙古襲来という未曾有の大困難の逼迫することゝあいまつて、ますく強烈なものとなり、これが強烈になればなるほど、大マンダラ罔頭の上にも、転輪聖王の勧請が頻繁となり、その呼称も整束されて来ているのです。

かくの如き高貴の大菩薩、三仏に約束して、これを受持す。末法の初めに出でざるべきか。まさに知るべし、この四菩薩、折伏を現する時は、賢王となつて愚王を諫責し、摄受を行ずる時は、僧となつて正法を弘持す。

とは観心本尊鉢の中の有名な一節ですが、この一節こそ、困難に際して転輪聖王の出現を至急する、当時の大聖人の心底を躍如たらしめるものであり、こゝに折伏の門を開いて愚王を諫責するという賢王とは、大マンダラに勧請された転輪聖王と対比して、決して無関係なものではなく、むしろ密接なる関連性をもつもの、と申されましよう。

蓋し、この賢王が、王仁冥合という輪翼的関係にある存在ではなく、あくまでも法主・國従の立場にあるものであるということは、本仏釈尊の本吾属である六万恒河沙の、本化地涌の菩薩団の上首・上行・無辺行・淨行・安立行という四大菩薩が、仏勅をこうむつて末法濁惡の乱世に應現するものである、と明記されていることによつても明かにされるところです。

ところが通常、この一節は、文面のみをみれば、

四大菩薩へ 折伏——賢王——愚王諫責  
攝受——僧——正法弘持

というようになり、ともすれば賢王と僧とが対等し輪翼的関係によつて王仏冥合の実をあげるものであるかのようにとられがちですが、若しそうであるならば末法の僧は摄取主義ということとなり、大聖人本来の末法折伏主義とは、全く矛盾することになつてしまひます。

そこで、この一節は、文上の文面によらず、文底の文意によつて、末法斗諍堅固の渦巻乱世にこそ、本化

地涌の菩薩が僧俗西面に出現すべきことを主意とし、更に、この一節につゞく本尊鈔に、

この時、地涌千界出現して、本門の釈尊の脇士となり、一國浮提第一の本尊、この国に立つべしと示されているように、「この時」という自界叛逆・西海浸邊の二難の逼迫している時こそ、大惡は大善の来るべき瑞相なり。一國浮提うち乱すならば、闕浮提内広令流布は、よも疑い候じう。

という大確信のもとに、僧俗あわせて地涌千界の菩

薩として、本仏釈尊の脇士となり、一國浮提第一の戒坦本尊を日本國に建立すべく、大聖人みずから本化の僧として獅子奮迅している折から、とりわけ愚王を折伏説する賢王か、いまだ出現していないことをかれりみ、かゝる賢王、即ち転輪聖王の出現を主眼としてこれに対する大聖人の切なる願いが発露したもの、と解すべきであります。

以上これを要するに、三大秘法鈔を後世の偽作とみなした場合、大聖人の全遺文中、遂に見出すことの出来なかつた統一戒坦思想なるものは、御本尊集に收録された百二十三幅の大マンダラ中、その五十一幅に、年を追うごとに、ます／＼顯著に勧請されて來ている転輪聖王という文字の紙背に、大聖人の言外にも出されない切なる祈りとして、感取することが出来ましよ

お願  
願  
い

鷺峰六月号

本誌五月号に折込みました振替用紙に

誌料一部五十円(手元十円)

半年三百円(手元六十円)

一年六百円(手元一百二十円)

計三百六十円

としてありました、これは郵政省の郵便代値上げ以前のものであり、昨年来十円の送料が二十五円となつて、ますので、次のように改正いたします。

一部五十円(手元二十五円)

半年四百五十円(手元共)

一年九百円(手元)

定価五十円 送料二十五円  
昭和四十二年六月五日 通卷第三十七号  
昭和四十二年六月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二二五

鷺峰

会

電話(身延山)四五九番  
振替(甲府)二〇九三番

誌代

半年分 四五〇円  
一年分 九〇〇円  
一年分 三〇〇〇円

なお誌料未納の方は、なるべく早目に御志納下さいますよう、お願い申上げます